

韓中日NGOと地球市民の出会いを通じて東アジアの環境の過去、現在、未来を見る！！

安 昌娟 (Ahn Chang Youn)

どの国でも同じであるが、博覧会を開催する愛知県名古屋市は、準備で非常に忙しかった。市内のあちこちにモリゾーとキッコロが描かれた垂れ幕がかかっている、特に21世紀の最初の博覧会だったせいか、日本列島全体が揺れていたような気がした。1日の入場者数の最高は28万人。37度以上の猛暑、台風、入場待ち客3万6000名など、さまざまな記録を打ち立てた博覧会であったが、何より美しい環境をつくるための、“市民・政府・NGO/NPO”の共同による盛大な祭りだったといえる。

今回の愛知万博は、予想入場者1500万名を大きく上回る2200万名余の入場者を記録した。これは、1993年の韓国大田博覧会の1100万名を2倍近く上回る入場者数だった。また、過去の博覧会会場は、博覧会が終わった後は格好悪い建物へと転落するか、周りの景観とはかけ離れたテーマパークとして造成される場合がほとんどだった。

しかし愛知万博は、竹、ウッドデッキ、屋上緑化、壁面緑化など周辺景観との最大限の調和に成功した。愛知は日本語で「あいち」と発音するが、愛を知るという意味だ。そのためもあるのか、地球を愛する愛知万博は“自然の叡智”を主題に、企業パビリオン、NGO/NPOパビリオンなど、すべての施設を環境配慮型で造成し、半年にわたって環境親和博覧会を開催した。

長久手会場の全地域をスカイループを通して歩くことができ、大部分の構造物は鉄材構造ではない木材構造物を使い、建物壁面緑化、屋上緑化などでエネルギー効率を高め、美的構成にもおおいに神経を使った。

また、今回の博覧会は参加者が直接参加するプログラムが多かったというところに意味があった。これまでの博覧会は企業パビリオンや国別パビリオンに設置された施設を見るという観光レベルのものに過ぎなかったのに対し、愛知万博は参加者が直接体験して作っていくプログラムが非常にふんだんな博覧会だった。

その中心となるのが“遊びと文化のゾーン”と“林の中自然学校”だ。“遊びと文化のゾーン”は大きく2つの部分に分けられる。遊びが中心になる「Growing Village」と参加が中心になる「地球市民村」だ。「growing village」ではウッドデッキに沿って歩きながら、自然の音を聞くことができる。神秘的な雰囲気さえ漂う中で、観覧者たちは自然の中の自然を楽しむ。このような「Growing Village」の中でなら、子供たちは自然とともに成長して自然を愛する心を育てて行くことができると思った。

そして世界各国のさまざまな環境、政治、社会、経済問題を直視しながら理解を深めるところが、地球市民村だ。地球市民村には、6ヶ月に渡って30ユニットの非政府・非営利機関が参加した。9月に参加した団体の1つは、東アジアの環境問題を知らせる「日中韓環境見聞館」だった。「日中韓環境見聞館」がある地球市民村は、竹製の丸いドーム6個とその周りにある茶畑、オーガニックカフェから構成されていた。一回り大きいドームの空間や広場では、多くのプログラムが進行された。

【日中韓環境見聞館について】

“日中韓環境見聞館”は、日本、中国、韓国の環境問題を分かりやすく、面白いクイズを通じて来場者に知らせるプログラムを展開している。入口の左側は“おどろ木”を作る所で、日中韓の環境問題をQ & A方式で伝えて、木の幹を描いた布地に木の葉スタンプを押して木を完成させた。

例えば、「日本人は割り箸1膳を平均でどれくらいの期間で使うのか？」答えは「2日に一度」。「中国の北京で出されるごみを並べたら、名古屋からどこまで行くか？」答えは「平壤まで」等々、おもしろいクイズなどが行われ、絶滅危惧種である中国のジャイアントパンダやアモイ虎、ジュゴンに関する簡単なクイズもあった。

また、毎時行われた環境ニュースステーションというプログラムでは、“漂着ごみ”がテーマの1つに選ばれた。中国で捨てられたごみが韓国へ、韓国で捨てられたごみが日本へ、また日本で捨てられたごみは太平洋に行く過程をニュース司会者とリポーターが分かりやすく説明するプログラムだ。これを視聴した参加者は、川から流れる漂着ごみの深刻性が分かったという。

出口近くにある環境メッセージコーナーは、紙に環境に対するメッセージを書いて、大きな紙に貼り付けることで、ジャイアントパンダやアムール虎、クロツラヘラサギの絵を作ることができる。環境メッセージを作成した人には、日中韓3言語で書かれた環境メッセージIDカードを発行し、環境メッセージとして活動することができるきっかけを与えた。ここでは、自分の名前が他の国の言葉でどのように表記するのか非常に不思議に思う外国人を見ることができた。

【愛知万博「地球市民村」に外国人スタッフとして参加して】

地球市民村のNGOパビリオンに参加するすべてのスタッフが、非常に熱心に仕事をしていた。韓国ではあまり見られない、真摯なまなざしと開かれた心で来場者に接するスタッフの姿を見て、普段KFEMで仕事をしながら鈍くなった私の心を引き締めるのに良い機会だった。

17日間毎日、朝6時に起きて40分後に出勤し、博覧会会場まで2時間位かかって午後6時まで働いた後、再び2時間をかけて帰った。昼休みは食パン1枚と果物1つくらいで済ませ、残り時間は座って眠り、夜に旅館で遅番のスタッフたちと話をすれば、深夜1時をまわって寝るのが常だった。夕食も簡単にパンで済ませ、休日には日本にいる時間が非常に惜しくて、観光で1日に5、6時間以上歩き回る強行軍だった。名古屋の天気は平均34度(最高37℃)位になったので、肉体的には非常に大変な出張だと言える。

しかし、外国で現地のスタッフと過ごしながら、同じ地球人として環境を愛する心を感じることができた。大部分のスタッフは、ボランティアの大学生とNGOの活動家たちだった。専攻、個人の性格、バックグラウンドなども多様な人びとが集まってお互いに励まし合っていて、私がいた期間中は地球市民村スタッフの中で唯一の韓国人だったにもかかわらず、全然さびしい思いをすることがなかった。

参加期間中、クチナシを利用した韓国の伝統的な染め付けワークショップをする機会があった。日本ではクチナシを利用して染め付けをする方法がないのか、老若男女を問わずに爆発的な人気があった。自然から得た美しい色と健康との関係などについて説明しながらプログラムを進行した。その翌日には読売新聞と中日新聞に私の記事が掲載された。韓国に関することを少しでも知らせることが出来る機会に恵まれ、胸がいっぱいだった。

高校生から50代後半と思われる大人まで多様な年齢層だったスタッフは、インターネット、もしくは個人的な勧誘で募集を知って応募してきた。宿泊所と朝食は無料で提供され、ボランティアごとに少々差はあるものの、昼食や夕食も高い食べ物を買うことはできなかった。毎日、パンやラーメンで済ますような日々で、そのために病院へ行くことになったボランティアもいたが、それでもボランティアの顔は明るく、さわやかな姿だった。

こうしたためだろうか、誰も大変だと不平を言ったボランティアはいなかった。閉会式では、みんな心



残りの涙を流し、お互いに心から湧き出る「本当にお疲れ様でした」というあいさつだけが、何時間もの間続いたようだった。

今回は、私の国のボランティア管理とはまた別の姿を見せられた。博覧会史上、一番多いボランティアが参加した博覧会だったし、入場者数と経済的波及効果でももちろん成功を収めたが、何よりボランティア管理及び参加面で非常に成功した博覧会だったと思う。

個人的には、日本に出張に行く事前準備も不足していたし、予想とは違って博覧会の内部あちこちを見回すことはできなかったけれど、環境に対して十分に思いをめぐらせ、感じることもできた良い時間だった。